やぶなべ会報

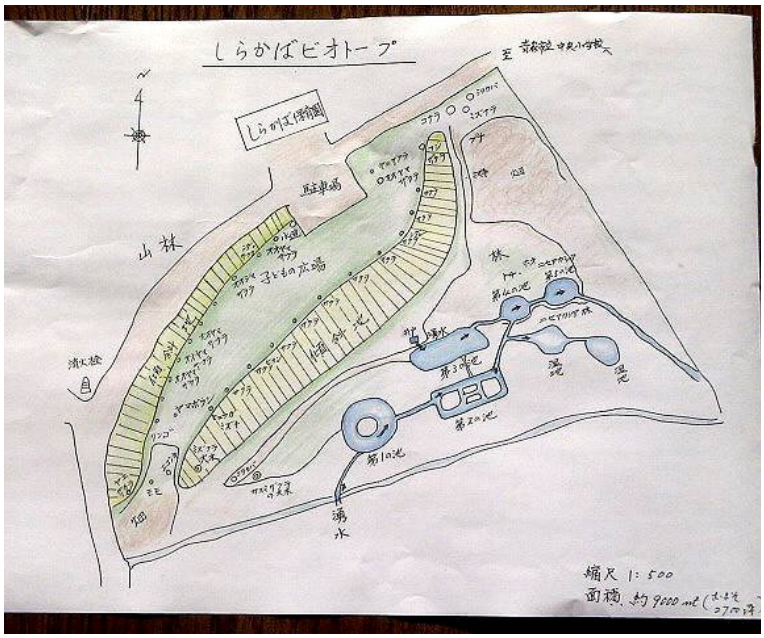
自然を見つめる「やぶなべ会」（青森）発行

誌　　名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	28 / 2010 / 26-28
タイトル	10年目を迎える「しらかばビオトープ」
著　者　名	小山内孝・五十嵐正俊

10年目を迎える「しらかばビオトープ」

顧　問　小山内　孝
第3代　五十嵐正俊

2002年に造成を始めた「しらかばビオトープ」も2011年には10年目を迎える。付近は元々、青森市の郊外丘陵地として生物多様性に恵まれた地域で、付近農家の採草地として利用されていたのであるが、「ノウサギ」「キツネ」「タヌキ」などが歩き回り、「オオジシギ」「ヤマドリ」「ノスリ」「オシドリ」「ヨタカ」などが普通に観察、または鳴き声の聞かれた土地だった。戦後は一部が官行造林地としてカラマツが植栽されていた。しかし、近年は急速に開発が進み、環状バイパスの開通、宅地化の進行などで急速に自然環境が変貌されて来ていた。



[図1] しらかばビオトープの模式図

2001年「しらかば保育園」の運動場用地として約 9,000㎡の土地を購入（2001年）した序でに荒れ地化していた笹おい地の一部にビオトープの造成を始めたのが2002年4月であった。

場所は保育園前の谷間で一部は廃棄物の捨て場にもなっていたので、重機を入れて廃棄物を撤去しながらの工事だった。造成当時は赤土が露出し、どうなるものか心配であった。とくに設計図もなく思いつくままに池にする穴を掘ったり、均したりして工事が進められていった（図1）。

一部に自生していたニセアカシアの成木は極力残すことを基本に数本は伐採して土木用材に利用しながら知人のSさんやHさんに重機の運転をお願いしての作業だった。

最初にドウナツ形の池を掘って貰った。ところが、夏になると湧水の溜まった穴には多数のボウフラ（蚊の幼虫）が発生していた。これを見た五十嵐は慌てて三内の沖館川遊水池（リバーランド沖館）からメダカ15～16頭を掬ってきて放流したのだった。同時に「ヌカエビ」「ジュズカケハゼ」「タニシ」「カワニナ」などもそれぞれ10頭前後が放流されたのだった。

[写真1] ビオトープの池に生息するメダカ

[写真2] ジュンサイの花

[写真3] 産卵中のクロスジギンヤンマ

[写真4] 卵を見守るシナイモツゴの雄

[写真5] ヤマアカガエル

[写真6] アズマヒキガエル

[写真7] シュレーゲルアオガエル?の卵塊

その後に造られた池は細い水路で連結されながら下流方向に増やされ、結局、最終的には大小5面の池と当初からの立木地、植栽木、観察路などが配置されて現状の姿となっている。

2004年、元青森営林局造林課におられた工藤悦郎さんに調べて貰ったら、しらかばビオトープ内の植物種だけで、282種確認出来たそうである。この中にはビオトープの植樹祭をやった時に植栽して貰った山引き苗(伐採跡の土地から採集して苗畑で養成した苗)の「ブナ」「ヒバ」なども含まれるが、付近の隣接地から種子が飛来して自然発芽した「アカマツ」「タニガワハンノキ」「オニグルミ」などが自生し、拾ってきた種子から発芽した「トチ」、緑化用に購入したサクラ類や各種樹木、土止め用に使用した粗朶が発根して成長したヤナギ類など人為的に導入されたものもある。現在ではこれらが成長過程に入っていて、樹林地への変貌過程にある様である。

いっぽう、池の中には導入されたジュンサイ(写真2)、ミツガシワ、ヒツジグサ、フトイなどがそれぞれ植物自体が適応できる場所を見つけて繁茂している。

植生の繁茂と共に水辺が出現すると上空から水生昆虫類が飛来し、付近の森からカエル・ヘビなども集まってくる。トンボ類などは今までに飛来、または繁殖が確認されたトンボ類は54種であるが、最近定着している種数は45～46種である。真っ先に飛来したヤンマ類は「クロスジギンヤンマ(写真3)」であったが、何故か2010年ビオトープ内での羽化は確認できなかった。しかし、市内の平面的な「リバーランド沖館」「笹森沼」「共生の郷」「あずましの水辺」「横内遊水池」などに比較すると「しらかばビオトープ」は5面ある池が微妙に異なる立地環境にあるため、植生の違いなどもあり、棲息する種数ははるかに多い様に思われる。

最近ではメダカ(写真1)が細い水路を通して各池に分散・繁殖している他、小谷沢のジュンサイ栽培地で採集・放流した7～8頭の「シナイモツゴ(写真4)」も順調に繁殖し、毎年、宮城県方式の産卵ポット(プラスチックの小型植木鉢を水面に浮かべる、ごく簡単なもの)によって数千粒の産卵が確認されている。

両性・爬虫類の仲間では真っ先にやってきたのが「ヤマアカガエル(写真5)」で、早春まだ1m近い残雪があるのに3月中旬には産卵が見られるのであった(その後いろい

ろな観察からヤマアカガエルは水底で皮膚呼吸しながら越冬しているらしかった)。最初「アズマヒキガエル(写真6)」は現れなかったのだが、数年前、産卵が確認されて以来、毎年産卵・孵化が見られ、2010年には「ヤマアカガエル」よりも多いように思われた。そして、2010年5月にはミニ「ガマ合戦」も行われていた。

夏になれば水草の上に小さな卵を産み付ける「ツチガエル」(成体の背面に白線のある個体もあるが、ビオトープでは白線のない系統らしい)も産卵するが、ツチガエルの卵塊は水面に近いのと夏場なのでアメンボの攻撃を受けている卵も多数観察できる。

池の岸辺に青草が目立つようになると白い泡の中に産卵するシュレーゲルアオガエル?の卵塊(写真7)も草の中に埋め込まれる。夜はこれらのカエルたちの合唱で賑わっている。

カエルが殖えるとそれを狙ってヘビたちが棲みつく。確認されているのは「シマヘビ」(写真8)だけであるが多い日には大小5頭の個体が見られたことあった。

「共生の郷」(東部環状バイパス沿いの国土交通省造成の官製ビオトープ)では侵入した「モツゴ」に「メダカ」が圧倒されて「モツゴ」優先のビオトープになっているが、「しらかばビトープ」では「メダカ」と「シナイモツゴ」は完全に共生しているように見える。

この他、ゲンジボタルなどホタルの餌として知られる「カワニナ」や「モノアラガイ」「タニシ」なども多数繁殖し、2009 年からは「ヘイケボタル」の自然誘致にも成功し、付近住民も日が暮れるとホタル鑑賞に集まって来る。

チョウ類もいろいろ繁殖しているが、2009年には自生している「ヤマネコヤナギ」の枝に「ヒオドシチョウ」の集団を見つけた。この集団は蜂の攻撃が見られたので途中から室内飼育に切り換え無事蛹化・羽化して飛び立って行った。

[写真8] シマヘビ

[写真9] ダイサギ

[写真10] トウホクノウサギの糞

[写真11] 抱卵中のキジバト

ビオトープの春は「カスミザクラ」が満開となり、池では高山の池塘以外では珍しい「ミツガシワ」の花が咲き、「ヨツボシトンボ」など早春のトンボも飛び交い最も華やかな景観を呈するので、保育園児の自然観察はもとより、付近住民の憩いの場にもなっている。

最近では「ダイサギ(写真9)」「アオサギ」などの大型鳥類の他、「カルガモ」が孵化した雛を連れて池に現れたり、「トウホクノウサギ(写真10)」の糞が多数雪解けの雪面で発見されたり、造成後自然発生した「タラノキ」で「キジバト(写真11)」が営巣して雛が生まれるなど年々生物多様化を実感できる様なビオトープになりつつある。